

9.11 あの日あの時 —日本人として思ったこと

事件の直後、私はすぐさまニューヨークに飛んだ。

あれから20年、今でも忘れられない光景がいくつも。



一般社団法人 海外邦人安全協会

理事 福永佳津子

今年は、世界を震撼させた「9.11」の惨劇から20年の節目に当たる。マンハッタンの突端で天空を突くかのごとく威風堂々とそびえ立ち、米国の権威と栄華を象徴していたツインタワー。それが撃ち抜かれ、間を置かずして別機がペントAGONに突っ込み、国會議事堂を、いやホワイトハウスを狙ったとされたユナイテッド93便がペンシルバニアに墜落した「同時多発テロ」は、一瞬にして2977人の命をもぎ取った。邦人犠牲者は24人。

「セカンドパールハーバー」とも

直前の2001年5月(日本では7月)、『パール・ハーバー』と題した映画が公開されていた。戦争が舞台だが、完全な恋愛映画で、米国の映画評論家たちは「この国の知識層は、パールハーバーへの誤解をすっかり解いている」と口をそろえていたというのに2機目が南タワーに突っ込んだ瞬間、テロを確信した人たちのどこからともなく、「予告もなしにテロ行為をするって日本人のお家芸だよね」となったからたまらない。市バスに乗っていた日本人学生は乗客に「お前は日本人か」と唐突に詰問され、NY大学では日本人学生がキャンパスから出られなくなった。また、日本人と間違えられたパキスタン人女性は車にひかれそうになっている。メディアは、何の躊躇もなく“Second Pearl Harbor”と揶揄し、“kamikaze”と印字した。すぐさまアフガニスタンのビンラディンの名が挙がったが、国外に出

たら思わぬことで自国の“過去”が蒸し返されかねないことを覚悟しておく必要がある。

一瞬にして絶望と怒りと悲しみが混在する灰色の町と化したNYの市民たちは、おびただしい数の星条旗をそこかしこにくくり付け、「結束」を誓って肩を震わせていた。そんな中で、ひときわ大きな星条旗を付けたタクシーは、決まって運転手がアフガニスタン人だった。結束の輪に入りたい強い意志をあえて旗の大きさで示したもの、市民の怒りの標的になり乗車を拒否され、けんか沙汰になっていた。

NY滞在中の定宿はバックパッカーたちが利用するドミトリード。携帯電話がないあの時代、受付のおばちゃんが私を捕まえて、あきれたようになってきた。「1台しかない電話にかけてくるのは日本人の母親ばかり。自分で危機を乗り越える力がないなら来るんじゃないよ。いちいち取りつげるから」。



工事現場の足場にたくさんの星条旗 「米国に幸あれ」「家族と犠牲者のために祈ろう」と書かれた垂れ幕と共に

癒えることのない深い悲しみ

グランドセントラル駅のミッシングボードに